

中等部第3回

国語

令和8年2月4日実施

50分

2026年度

〔受験上の注意〕

- 一、問題は〔一〕～〔三〕まであります。
- 二、解答時間は五十分です。
- 三、解答用紙はこの冊子の最後にあります。解答は解答用紙の所定のところに書いてください。
- 四、問題冊子・解答用紙に、受験番号・氏名を記入してください。

受験番号	氏名

〔一〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、設問の都合上、本文には表記を変えたり省略したりした部分があります。

中学三年生の鈴木真優は、ホタルの生育環境保護のボランティアに興味を持っていたが、友だちグループの中心的存在である遠藤咲の目を気にして参加を決めきれないでいる。その活動には、人づきあいが苦手で孤立し、咲からも敵視されている、虫好きの吉岡さんが参加することになっていた。本文は、咲に内緒で、真優が吉岡さんとホタルの生息地を訪れた場面である。

ぴちよん、と水面でなにかが跳ねたのがわかった。魚かと思ったけれど、それにしても小さすぎる。アメンボだ。一匹のアメンボが水面に何重もの輪を作りながら進んでいく。

なんだか自分の心の中にも輪が広がっていくような気がした。それをじっと見つめながら、わたしは吉岡さんに伝えたい言葉を真剣に考えた。

「詳しくはわからないけど。でも、わたしが知ってる吉岡さんは、優しいよ。優しいから、わたしがボランティアをやりたがってるって気づいてくれたんだと思う」

自分で言っていて泣きそうになって、ぐっとこらえた。鼻の奥がツンと痛い。心の底から思っていることを言葉にすると、涙が出てきそうになるのはどうしてだろう。

うつむいたままのわたしに、吉岡さんは小さな声で言った。

「鈴木さんってさ、Xだって言われない？」

パツと顔をあげる。吉岡さんは空を見たままだった。

そんなの、一度も直接言われたことはない。

だけどわたしの周りの人はきつと、わたしのことをそう思っているだろう。

咲の機嫌を取るためにいい顔をして、吉岡さんに対するグチだつてうなずきながら聞くくせに、吉岡さん本人の前ではニコニコ笑っている。そんな自分のことをきらいだつて思う。

ほたり。わたしの頬から垂れた滴が水面に落ちた。それに驚いたのか、アメンボが逆方向に跳ねていく。

吉岡さんはわたしが泣いていることに気づいてため息をついた。

「ごめん」

「ううん、ほ、本当のことだから」

「……わたし、思っていることをよく考える前に言っちゃうんだ。昔からそうなの」

少しだけ震えた声。一瞬だけ吉岡さんも泣いているのかと思っただけれど、そんなことはなかった。

むしろその逆で、彼女は笑っている。口の端が引きつった、とつても悲しい笑顔。

「どうしてもっと相手の気持ちを考えてしゃべれないの、って何回も怒られた。でも難しくて、気づいたら人を傷つけて……それがきっかけで転校することになったんだ」

世の中には「人に合わせるのが苦手な人もいる」んだって、道徳の授業で習ったような気がする。それは病氣じゃなくて個性だつて、小学校のときの担任の先生が言っていた。そのときは理解したはずだったのに、今わたしは吉岡さんになにを言ったらいいのかわからない。

「だから、わたしは全然優しくないよ。人と話すとひどいことを言っちゃうから、今の学校では必要以上にしゃべら

ないようにしてるだけ」

ほほえみを崩さないままそう言った吉岡さんに、「そんなことないよ」と言いかけてやめた。

だつて、わたしは吉岡さんの考えを否定できるほど吉岡さんのことを知らないから。

「……でも、わたしは逆に言いたいことをなんにも言えないから、自分の考えていることをハッキリ言えるのってかっこいいなつて思う」

それは心からの言葉。口に出してしまつてからハツとする。

彼女はそれがコンプレックスなのだから、触れられたくない部分だつたかもしれない。

あわてて謝ろうと口を開いた瞬間、

ブウン

「わっ!?!」

耳元でなにかが飛んで、思わず声をあげる。

そんなわたしを見て吉岡さんも驚いた顔をして、そしてケラケラと笑った。

「ハチだよ、ハチ」

「えっ、ハチ!? 逃げなきゃ!?!」

「違う違う、ただのミツバチ。ほら」

ハチだなんて言うから、スズメバチのように毒のあるものを想像してしまった。吉岡さんが指さした先に飛んでいたのは、小さくて体も丸っこいミツバチ。

「なんだ……よかった」

ミツバチがめつたに人間を刺さないことくらい、わたしだって知っている。川べりに咲いていたピンク色の花に少しだけ止まって、それからまた音を立てて飛んでいった。

「意外と黄色くないんだね」

「黄色いのはセイヨウミツバチって言って、蜂蜜を作るのに飼育されてる種類。今は黒っぽくて小さかったから二ホンミツバチ」

早口で一気に説明してくれた吉岡さんにまた驚く。吉岡さん、本当に虫に詳しいんだ。

「今の……二ホンミツバチは蜜を集めないの？」

「集めるよ。女王蜂のために集めて、巣に帰る」

女王、という言葉を受けて、わたしの頭の中にはまた咲の顔が浮かんできた。

咲が女王蜂、わたしは女王様のご機嫌がよくなるようにせつせと蜜を集める、下っ端の働きバチ。

そんなことを考えて、似合っているなと思ってクスツと笑ってしまう。

「なに？ 思い出し笑い？」

「ご、ごめん。……わたし、ミツバチみたいだなあって自分で思って」

なにも説明しなくても、吉岡さんにはその意味がわかったみたいだった。

「……吉岡さんはうなづくことなく、そつと水面を指さす。」

③「……鈴木さんはミツバチじゃなくて、あれ」

そのままその場にしゃがみ込んだ吉岡さんの隣に自分もしゃがんで指の先を見る。

ピチョン、ピチョン。

水の輪っかを作りながら進んでいくのは、さつきも目に入ったアメンボ。

どうして？ と思いながら吉岡さんのほうを向くと、彼女はメガネの奥の瞳をキラキラさせながらアメンボを観察していた。

そしてこちらを見ないまま、口を開く。

「アメンボってカメムシの仲間なんだよ、知ってた？」

「えっ!？」

カメムシって、茶色くてくさいにおいを出す、あの？

似ても似つかない姿に、再び水面のアメンボを見る。細長い体に長い脚。決してかわいいとか美しいなんて言えないけど、カメムシほどの不快感はない。

「カメムシと同じように臭腺があるんだけど、カメムシとは違って餛蛄みたいなにおいがするからアメンボって名前になったんだって」

「え、甘いのか？」

「前に嗅いでみたけど、ほんのり甘い感じはした。餛蛄ってほどじゃないけどね」

「嗅いだことあるんだ……」

驚くけど、吉岡さんなら抵抗なくやりそうだ。

でも、それってわたしがくさいってこと？ と不安になる。カメムシのようにくさいと言われたら立ち直れない。ちゃんと理由を聞く前に、吉岡さんがまた話します。

「あれは、コセアカアメンボだね」

「コセアカ？」

「体がちょっと茶色いでしょ？ 赤とまでは言わないけど」

「たしかに」

アメンボって黒いイメージだけど、視線の先にいるアメンボは茶色く、日光の当たり方によっては暗いレンガのような色にも見える。

「あ。もしかして、『あめんぼあかいなあいうえお』って、コセアカアメンボから来てるの？」

「なにそれ」

「聞いたことない？ 小一くらいで、授業で読まなかったっけ」

「覚えてないや」

「どうやら吉岡さんは、わたしが思っていたよりも昆虫こんちゅう以外のことに興味がないらしい。

帰ったら自分で調べてみようと思って頭の中にメモをとった。

「それにしても、アメンボとカメムシが仲間なんて知らなかったな」

そうつぶやくと、再び吉岡さんのメガネのレンズがきらつと光った気がした。

「口とかはねとか、体の基本的な構造は一緒らしいよ」

「はね？ アメンボって飛ぶの？」

「飛ぶよ。だって水たまりとか池とか、他の水辺とつながってないようなところにもいるじゃん。飛んできてるんだよ」

「そうだったんだ」

アメンボが空を飛ぶ姿を見たことはないけれど、吉岡さんの説明を聞いたら納得なっとくだ。空を飛んで、においを出す。パッと見た姿はまったく異なるのに、生態は確かにカメムシに似ているみたいだ。

「カメムシと違うのはやっぱり脚かな？ アメンボはすごく長いよね」

わたしの言葉にうんうんとうなずいた吉岡さんは、本当にうれしそうな顔をしている。

「アメンボは水辺で生きるために、水の上を進めるように脚が長く進化したのかもよ。そう考えたらすごくない？」

環境への適応力っていうか」

「う、うん。すごい」

「しかも、アメンボが作ってる水の波紋はもん、見てみて。これがエサを見つけたり、危険を察知したりするレーダーになってるんだって」

「へえー……」

さつきから、わたしの知らない、どこか別の世界の話の話を聞いているようだった。だけど話の中心であるアメンボは、実際にわたしの目の前に生きている。

知らなくても生きていけるけれど、知ったら感心してしまうような知識を持っている吉岡さんは、自分よりも一段高いところを生きているような気がした。

「あのさ。どうしてわたしがアメンボなの？」

「あんな理由たずを尋ねると、吉岡さんは驚いたように目を見開いた。

そして、「伝わらなかつたんだ」としょんぼりした声で言う。

「あっ、ごめん。わたしの理解力が足りないのかも」

「うん。わたしが伝えるの下手だから。ちょっと待ってね」
首を横に振って腕を組み、真剣に考えはじめる吉岡さん。少しでも気持ちを汲めればと、これまでの会話を思い出しながら次の言葉を待った。

「鈴木さん、いろんな場所でうまく適応しながら生きてるじゃん。わたしとも、遠藤さんとも、うまくやってる。そういうところがアメンボに似てるって、言いたかったの」

思いもよらない理由にハッとす。

そんなの過大評価だ。わたし、そんなにすごい人間じゃない。

「……わたしはこんなふうに水の上を歩けてないよ。いつもおぼれてるようなもんだし」

なにを言うにも周りの目を気にして、顔色をうかがって。言うかわないか迷っているときは、水の中でもがいているのと一緒だ。そんなわたしのことを、吉岡さんはアメンボに似ているのだという。

「うーん、なんか鈴木さんは、これからどんな場所に行っても、アメンボみたいに上手に歩いていきそうだなって思った」

どんな場所に行っても。その言葉でわたしは思い出した。

今まで、幼稚園でも小学校でも、クラス替えがあっても、クラスでひとりぼっちということはなかった。嫌がらせをされたり面と向かって悪口を言われたりしたこともない。

それは、わたしが X で相手に合わせて過ごしているから。

だけど吉岡さんはそんなわたしの性格を長所だと言ってくれる。そして。

「水の中でおぼれちゃうならさ、水の上を歩けばいいんだね。川でも、池でも、水溜まりでも。それができる鈴木さ

んがなんだかうらやましい」

その言葉を聞いた瞬間、ストンと、心の中になにかが落ちた。

今わたしがいるのは、暗くて濁っていて泳ぎづらい水の中。そんな「合わない」場所でもわたしは泳げる。吉岡さんが言ってくれたとおり、それはすごいことなのかも。

でも、無理して泳ぐことはない。わたしがいる場所は、ここだけじゃない。

別の場所でも、うまくやっけていけるかもしれない……。

そう思ったら、だんだんと気持ちが軽くなっていく。

わたしは水辺にそっと手を伸ばして、細長いアメンボに触れようとした。

その手に気づいたのか、逆方向へと跳ねていく。
きつと今、リーダーが作動して危険を察知したのだ。ほんの少ししか水面に触れていないのに、気づかれてしまった。

すごい。そうつぶやくと、横で吉岡さんは「でしょ？」と笑った。

吉岡さんがまるで自分が昆虫代表のような言い方をするのがおかしくて、わたしも声を出して笑った。

「吉岡さんって、本当に虫オタクなんだ」

「オタクって……まあ、否定はしない」

「ふふ。ホタル、見られたらいいね」

「うん、でも五人も集まるかな。ただでさえわたし、クラスのみんなにきらわれてるだろうし」

真顔でそう言った吉岡さんに、言葉がつまる。

さっきのアメンボがまた水の輪を作った。

「……集めようよ。あと三人。わたしも頑張るよ」

なんのアテもないのにそんなことを言ったわたしに、吉岡さんは大きくまばたきをする。

「鈴木さん、本当に参加するの？ ボランティア」

「？ うん。今度はちゃんと申し込むから」

「……そっか」

その口元がかすかにゆるんでいたら、わたしはなんだかうれしくなる。

そして、わたしと吉岡さんは暗くなるまでたくさん話をした。

吉岡さんは、お父さんが大学で生物学の研究をしていて、その影響で虫が好きになったこと。今住んでいる家は二丁目の動物病院の近くだけど、実は虫と違って動物はあまり好きじゃないってこと。話すのが苦手だと言っていたけれど、じつくりと話を聞いていけば嫌な発言なんて一つも出なかった。

家に帰ってスマホをチェックすると、咲たちとのグループラインにたくさんメッセージが届いていた。どうやらわたしがなかなかレスポンスを返さないことに不満を持ったらしい咲が、何度もわたしの名前を呼んでいた。

いつもなら焦^{あせ}ってうまい理由を考えて打ち込むだろう。だけど今、どうしてか気持ちはおだやかだ。

深呼吸して一言だけ、グループにメッセージを入れる。

⑤【わたし、ホテルのボランティアやることにしたんだ】

(五十嵐美怜『15歳の昆虫図鑑』講談社)

※五人も集まるかな……ホテル保護のボランティアは、五人そろわないと申し込みができないことになっていた。

※レスポンス……ここでは、メッセージに対して何かしらの反応をすること。

問一 Xに共通して入る四字熟語としてもっとも適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 十人十色 イ 傍若無人 ウ 用意周到 エ 品行方正 オ 八方美人

問二 線部①「鼻の奥がツンと痛い。」とありますが、なぜですか。七十字以内で説明しなさい。

問三 線部②「ため息をついた。」とありますが、このときの吉岡さんの心情を説明したものととして、もっとも適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 思っていることをよく考えずに言ってしまう自分の癖がまた出て、鈴木さんを傷つけ泣かせてしまったことを後悔している。

イ 自分では泣かせるようなことを言ったつもりはないのに、なぜ鈴木さんがすぐに泣くのか分からず、面倒に思っている。

ウ 鈴木さんにひどいことを言って傷つけてしまい、ホテルのボランティア参加を断られると確信してがっかりしている。

エ 自分の気持ちを話すべきか悩んでいたが、結果的に伝えたことで鈴木さんを泣かせてしまい、申し訳なく思っている。

オ 相手の気持ちを考えずに人を傷つけ、そのことが原因で自分が転校することになってしまった過去を思い出し、うちひしがれている。

問四 —— 線部③「……鈴木さんはミツバチじゃなくて、あれ」とありますが、吉岡さんはどのようなことを言いたかったのだと考えられますか。五十字以内で説明しなさい。

問五 —— 線部④「ストーンと、心の中になにかが落ちた。」とありますが、どのようなことですか。八十字以内で説明しなさい。

問六 —— 線部⑤「わたし、ホテルのボランティアやることにしたんだ」とありますが、このときの「わたし」の心情や様子の説明としてもっとも適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 吉岡さんと話をしたことで、ようやく本当の自分で見つかる場所を見つけることができ、今まで仲良くしてきた友人としばらく距離を置こうとしている。

イ 吉岡さんと話すうちに、自分の生き方に自信が持てるようになり、友人関係におびえる自分を変えようと、あえて強気にふるまい立場を逆転させようとしている。

ウ 吉岡さんとのやり取りを通して、自分の居場所は一つではないのだと思えるようになり、緊張しながらも勇気を出して自分の素直な気持ちを伝えようとしている。

エ 吉岡さんの言葉により、自分の生きがいボランティアにあることに気がつき、その思いを今までの友人に何とか理解してもらおうと、必死になっている。

オ 吉岡さんがボランティアへの参加をあきらめかけていることを知り、何とかその楽しさや意義を伝えることで友人たちに一緒に参加してもらおうとしている。

問七 本文中の表現や内容を説明したものとして適切なものには○、適切でないものには×で、それぞれ答えなさい。

ア 物語は「わたし」という一人称の視点から一貫して語られており、読者は揺れ動く「わたし」の心に寄り添いながら話を読み進めることができる。

イ 言いたいことが言えて悩みのない吉岡さんと、悩んでばかりいる「わたし」が対照的に示されることで、ちぐはぐな二人のやりとりがユーモアを交えて描かれている。

ウ 回想シーンを多用することによって、登場人物それぞれが過去に抱えていた問題や、それを乗り越えて前に進んでいく過程が印象的に描き出されている。

エ 本文に登場する「アメンボ」は「わたし」を象徴する存在として描かれており、また「わたし」が前に進もうとするきっかけにもなっている。

〔二〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、設問の都合上、本文には表記を変えたり省略したりした部分があります。

たとえば、目的地まで一気にバスで向かう遠足。私はこれを「速読」と似ていると感じます。行き先（要旨や主題）を検索で調べるのは、瞬間移動のようなものです。道中の風景や道のりは知らずに、いきなり現地に着いてしまうからです。だから、現地の記憶は多少残っていても、行き帰りの景色や空気はまったく思い出せません。一方、現地まで歩いて行って、お弁当を食べて帰ってくる遠足。これが「遅読」です。私は小学生の頃に往復6時間をかけて遠足をしましたが、行き帰りに見た風景や空気が、友だちとの会話、先生が「しっかり歩こう」と声をかけてくれた記憶は、今でも鮮やかに思い出せます。そう考えると、目的地にパッと移動せずに、わざわざ片道3時間かけて歩いた時間のほうが、自分の人生にとっては有益であったといえます。

こうした「途中の時間」の記憶は、今でも自分の中に生きている時間なのです。つまり、体験がサバイバルしている。

読書についても同じことがいえます。タイトルを検索して要約だけつまむような読み方は、せいぜい「行為」止まりで、「体験」にはなりません。

一方で、1か月、2か月かけてじっくり読んだ本は、読んだ時間自体が「体験」として自分の中に蓄積されていきます。

私は大学時代の夏休みに、友人と「この1か月で、ドストエフスキーの『カラマゾフの兄弟』を読もう」と決めて、読書合宿のようなことをしましたことがあります。その時間は「ドストエフスキー体験」として、10代の青春の記憶の一部になっています。

このような読書は、単なる情報収集ではなく「体験型」の読書と呼ばれます。本を読むという行為もひとつの「体験」であり、その世界に入り込んで、主人公の人生を疑似体験することもまた「体験」に含まれます。

結末に至るまでの道程をゆくりたどったその時間は、自分の生活の中に積み重なって、やがて忘れがたい記憶になっていくのです。

遅読のよさのひとつは、「考える」ことを伴うところです。

あまりにも速く読みすぎてしまうと、読書はただの情報収集になってしまいます。何でも検索すればすぐにわかっ

てしまう今の時代は、人間から「考える」行為を奪ってしまいます。

② 人間は、「考える」からこそ人間であるといえます。「考える」力が弱っていると、難しい判断、たとえば自分は

どう生きるべきかという大事な判断を、他人の手にゆだねてしまうようになります。人に判断を任せるのは、ある面では大変楽ですが、引き換えに、自分の人生を人に決められてしまう可能性も大きくなります。

読書というものは、一文一文を自分の中に引き寄せ、考えながら進んでいく行為です。たとえば小説なら「この情景はどういう感じだろう」と想像し、思想書であれば「著者がこう主張する理由は何だろう」「この論には自分は賛成しないな」などと問いながらページをめくっていきます。

このように、自分の心の声を引き出しながら「考える」ことが、読書の本質なのです。

遅読では、一文一文と向き合う時間が自然に生まれます。読み流すのではなく、文を読んで、ふっと立ち止まる。そして「これはどういうことだろう」と、その言葉の前で「考える」時間が生まれるのです。

たとえば『論語』は、一文一文が独立した短いフレーズなので、このような読み方にとっても向いています。

朝あしたに道を聞かば、夕ゆふべに死すとも可なり。

これを読んだとき、あなたは、「ふうん」と流すでしょうか？

それとも「ちょっと待って。生きるべき道がわかれば、その日の夕方には死んでも構わない、って……そんなにまでして求める『道』って何？」と立ち止まって考えるでしょうか。

自分にとって、そこまでして知りたい道ってあるだろうか。

どうしてそんなに道を知りたいのだろう。

道を知ったら、そこには何が待っているのだろう。もう死んでもいいって、どんな心境なのだろう。

そんなことを考えているうちに、時間は過ぎていくでしょう。しかし、それでよいのです。それが「考える」ということです。

その日、その一文と出会い、立ち止まって考える。すると、考えた分だけ、言葉が心に刻まれます。

一度に何十個も頭に入れる必要はないのです。「今日はこの言葉と生きてみよう」と思える。それは豊かな時間の過ごし方です。

③江戸時代の寺子屋での学びは、音読、素読を繰り返くし、言葉を暗唱おぼして憶えることでした。つまり、体に刻み込むような学び方です。その日に憶えた一文が、その人の内側を支える「骨」として残っていくわけです。

遅読は、人生を支えてくれる柱のような言葉を、自分の中に一本、また一本と増やしていくことができる読み方なのです。

速読と聞くと、「少しでも速く読み切らなければいけない」という気分になりますが、遅読は、自分の読みやすいペースで読んで問題ありません。

ページをめくる速度はもちろん、読む量、読み方も含めて「自分のペース」で読み進めて結構です。

たとえば見開きの2ページを読んだら、一度パタンと本を閉じてみる。あるいは「この台詞はかっこいいな」とか「今の一文はどういう意味だろう」など、立ち止まりたい部分に出合ったら、いったん本を置いて、頭の中で反芻はんそうしてみる。

私は推理小説でも、途中で本を閉じることがよくあります。なぜなら「次はどうなるんだろう」と、先を予測しながら読むのが好きだからです（その予想はだいたい外れるのですが）。読みながら、そんな「間」を取るのが楽しいのです。

また映画監督えいがくんとくのように、「この場面は、映画だったら、どういう映像になるだろう」とイメージすると、本の世界をいつそう豊かに味わえます。

「読む↓止まる↓味わう」という繰り返しによって、心地こちよい読書のリズムをつくるのです。

年を重ねた今、この読み方は、いつそう自分に合ったものになりました。長く読むと目が疲れるようになってきたからです。目を閉じて想像します。

年齢を問わず、いつでも自分のペースで読める。これもまた、遅読のよさです。

遅読のよさのひとつは、読書が「深く思考する」行為になることです。

ここでいう「深さ」とは、自分の内面に深く潜っていく「フック型の読書」です。

フック型の読書では、「もしこの本を読まなかったら、きっと思い出さなかっただろうな」という出来事が、意識の上に引き上げられてきます。潜水士が海の中に潜って財宝を引き上げるように、読んだ本がフック（釣り針）となって、意識の奥底に眠っていた記憶や感情を呼び起こすのです。

この「深く潜る」行為と、「ゆっくり読む」行為は、とても相性がよいです。

※「沈潜」する快感が、遅読にはあります。

読書のスピードが速いと、思考はどうしても浅くなります。展開が速ければ速いほど、脳は表層の情報だけで内容を処理しようとします。ですが、ゆっくり読めば、そのぶん考える時間、自分の記憶をたぐる時間、そして内省する時間が生まれます。

「これ、何かに似てるな」「自分にもこういう経験があったな」「これって自分にとってどういう意味だろうか？」

そんなふうには、自分自身の中に問いを向けていく時間。それが、読書の「深さ」につながっていきます。

私は、思考というのは、常に「外部」と「内部」の接点、あるいは出会いの場だと思っています。そして、両者の間を取り持つ媒体が本であり、読書は、外部と内部の世界が最も盛んに行き交う窓、交差点だと捉えています。

孔子の言葉に、「学びて思わざれば則ち罔し。思いて学ばざれば則ち殆うし」というものがあります。学ぶだけで考えなければ意味がないし、考えるだけで学ばなければ危ういという意味になります。つまり、「学ぶこと」と「思うこと」は両輪でなければならぬという教えです。

読書は「学ぶ」に近い行為です。そして、それを「思う」こと、つまり自分で「考える」ことができたときに、思考は深まっています。

思考が深まるためには、ある程度の「時間」が必要です。つまりゆっくりと読むことで、「学び」と「思考」のリズムが噛み合い、車の両輪のように回り出すのです。

（齋藤孝『遅読』のすすめ）SBクリエイティブ

※サバイバル……生き残ること。

※『論語』……古代中国の思想家である孔子と弟子たちのやりとりをまとめたもの。

※反芻……ここでは、何度も繰り返し思い、考えること。

※沈潜……物事に深く没頭すること。

※媒体……なか立ちとなるもの。

問一——線部①「『体験型』の読書」について、次のⅠ・Ⅱの各問いに答えなさい。

Ⅰ「『体験型』の読書」とはどのようなものですか。もつとも端的に述べられている一文を本文中から探し、最初の五字を抜き出して答えなさい。

Ⅱ「『体験型』の読書」の例として適切なものには○、適切でないものには×で、それぞれ答えなさい。

ア 外国文学を読もうと思い、初めにタイトルからどのような話なのかを想像し、内容をかいつまんで読み進めたことで、作品がよく理解できた。

イ 夏休みの宿題で読書感想文を書くために、友人と一緒に本を選ぶ約束をしたが、事前にインターネットで本の評判や他の人の感想を調べて参考にした。

ウ 少年たちが無人島に流れ着き、困難な状況でも助け合って生活する物語を読み、主人公がたくましく成長していく姿が自分と重なるような思いがした。

エ 学校の授業で明治時代の作家の作品を読み、初めは内容がよく分からなかったが、時間をかけていねいに読むことで、いっそう印象に残るものになった。

問二——線部②「人間は、『考える』からこそ人間であるといえます。」とありますが、読書においてはどのような姿勢で臨むことが大切だと筆者は考えていますか。「姿勢」につながる形で、本文中から二十字以内で抜き出して答えなさい。

問三——線部③「江戸時代の寺子屋での学び」とありますが、この例は本文においてどのような役割をしていますか。その説明としてもつとも適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 寺子屋で行われていた音読や素読といった学びには「遅読」と共通点があると示すことで、「遅読」の

特徴をより印象づけている。

イ 音読や素読に代表される、自分の体を使って言葉と向き合う姿勢は、時代を超えて現代にも受け継がれていることを強調している。

ウ 一度に大量の情報を処理するような、現代人がおちいりやすい読み方よりも、江戸時代の人々の読み方のほうが優れていることを示している。

エ 自分の内面に大切な言葉を一つずつ増やしていくという「遅読」の読み方は、江戸時代の寺子屋から始まったことを明らかにしている。

オ 現代人にぜひ取り組んでほしい「遅読」とはまったく異なる読み方を示すことで、「遅読」のすばらしさを一層際立たせている。

問四——線部④「自分自身の中に問いを向けていく時間。」とありますが、あなたがこのような本の読み方をした体験について、以下の条件をふまえて三段落構成で書きなさい。

①一段落目に、本の内容（書名でもよい）について書くこと。

②二段落目に、その読書を通して得たものを書くこと。

③三段落目に、その体験をふまえて「遅読」についてどのように考えるか、自分の意見を書くこと。

〔三〕 次の各文の——線部について、カタカナを漢字に、漢字をひらがなに、それぞれ直しなさい。

- ① 五月五日は端午たんごのセツクだ。
- ② ここで遊あそばないようにケイコクする。
- ③ セイケツなハンカチで手をふく。
- ④ 人をウヤマウ心をわすれない。
- ⑤ 知恵ちえを拝借する。

